

さわかせ

号数 第 3 1 9 号
発行日 令和 3 年 2 月 23 日
発行所 金光教 韮 教会
〒 550-0011
大阪市西区阿波座 2-2-10
TEL&FAX 06(6541) 6313
mail : kagiyama2001@ybb.ne.jp



広前でお取次される和田こゆみ先生（昭和40年頃）

二代韮教会長 和田こゆみ先生 50年祭をお迎えして

教会長 鍵山公生

和田こゆみ先生がこの世を神去られまして半世紀が経ち、世は移り変わり、先生に御取次をいただかれた方も僅かとなりました。今も健在の方数人に先生の思い出話を聞かせていただいたり、書き留めてくださいました文面を下記に掲載させていただきます。ここでは10年前の「さわかせ」に掲載した私の文に少しばかり手を入れて記載させていただき、先生をお偲びさせていただきますと思います。

先生の最大の喜び

先生は質素儉約にして、ご自分には厳しく、ある時 「私は、ここに参ってく



境内に咲く梅の花
(令和3年2月)

る信者の一番最低の生活している人を目標に、生活をするんや」と言われ、その言葉通り、先生は食べるものも、着る物も、一切自から買い求めることなく、ただ与えられたものだけを、神様からのおあてがいだとして身に付けられるのでした。そして、参拝者がおかげを頂かれ、「ありがとうございました」とお礼の参拝が出来ることを最大の喜びとしておられたように思われます。

親の生き方に反発して

そんなこゆみ先生も、若いときには父親の生き方に反発し、人を助けるならば「信心なんかもう古い、これからは医学によって人を助けるのだ」と考えて、助産婦や看護婦の資格を得るため、当時の漁師の娘としては高い教育を身に付けたのでした。

18才の頃には満州安東へ行っては医術を磨き、そのときにはタイ国皇太子の看護により勲章を賜ったり、乃木大将の懐中時計を譲り受けたりと、その功績は素晴らしいものが有り、また今の朝鮮の慈恵病院や従軍看護婦長として赴任もしました。

人生の大転換

しかし先生は自らの生き方に大転換させられることがありました。それは自分が面倒を見ていた弟たちの度重なる病死と先生自身の病気でした。

それは肋膜炎を患い2年間養生する中で、今までの自らの行いはこれで良かったのか、人を助けると言っても、病床にあってはどうしようもなく、また父親から



鍵山正雄師、藤子師の結婚式。後列中央は和田安兵衛師、その右側はこゆみ師

何度も伝え聞いている「お道の御用に立たねば家が絶える」という金光四神様（二代金光様）のお言葉でありました。

この病をきっかけに、「医学の道では、人を助けることが出来ても、自分の運命である命は助けてもらえない」と悟ったのです。それからは医学のことは元より、華道、茶道、またはお琴など自分の今までの全てを捨てて、お道の教師になる決心をしたのです。

教職を得て、諸々の縁があって韮教会に入り、和田安兵衛先生を神様と仰ぎつつ、病あがりながらも道の修行に取り組んだのです。その間にこんな事がありました。

教祖奥城での奇しき体験によるおかげ

それは大正14年の事でした。先生は御本部広前に参拝し、そして教祖様の奥城にて拝礼しておられたところ、どうしたことか奥城の門に体がぴったりくっついて離れず、怖くて怖くて「どうぞご無礼をお許してください」と一生懸命にお詫びをしていたら、奥城の教祖様が、神は親孝行者が来たからうれしい。帰ってみよ。大きなおかげを受けておるぞ」と仰った。そうしたら体が離れたというのです。

先生はお礼を申し、喜び勇んで大阪に帰ってきて、親先生に御本部であったことを告げますと、親先生は「ああ大きなおかげじゃ。地主さんが失敗して教会の土地を売らんならんことになった。25万円で買う人があるから売りたいが、お宅は長らく住んでいるから、貴方なら5万円引いて20万円で売りましょう。でなかったら、5万円渡すから他所へ移ってください。」と言われたと云うことです。しかし教会にはそんなお金はありませんから、2人でどうしたものかと思案していました。

そこへ参ってきた台湾で精糖会社を営んでいる信者の社長が、その話を聞かれ、「それは有りがたいことではないですか。実はこの度、専務を日本に帰す予定だったが、何か胸騒ぎがして帰ってきましたが、そういう御用があるからにわかには帰りたくなかったですな。先生、今日はたくさんお金の持ち合わせはないけれど、20万円で買われたら結構だと思います。とりあえず、ここに2万円を内金に上げときます。帰ったら後のお金は送りますから」と言われ買い取るようになったそうです。

その社長さんは後からの費用をいくら送って来られたかは定かではありませんが、その方の熱意によって買い取るようになったことは確かで、こゆみ先生は一所懸命に始末をされて支払われたと伺っております。その韮の土地は戦後、米軍の簡易飛行場になった為に接収され、同じ場所に戻ることは出来ませんでした。その土地の借地代が入り、今の教会の土地を購入する元になったようです。地主さんが売りたいと言われた時に買っていなかったら、現在の教会の土地も取得できなかったでしょう。ともかくこゆみ先生が教祖様奥城の前での不思議な体験によるおかげの他はありません。

初代教会長帰幽後、試練を受けて

昭和16年12月14日、第2次世界大戦が勃発し、戦雲は悪化の一途を辿り、昭和18年12月3日、老先生と仰がれ、神様と頂いてきた初代教会長和田安兵衛先生は帰幽され、続いてやっと支払いができた教会建物は米軍の空襲によって消失しました。終戦後は無一物からの再布教に立ち上がることになったのです。その時、既に58歳で、世間では定年といわれる年齢になっての再布教は、並大抵ではなかったでしょう。

布教するべく土地や家探しから始め、幸い信者さんのお力で明治小学校附属幼稚園の跡地をかうことになりました。そして廃材を利用したトタン屋根の広前にむしろ3枚敷いたお広前での再布教が始まりました。

しかし昭和25年の関西地方を直撃したジェーン台風により倒壊し、即刻広前新築の願いを立て、わずか2か月足らずの突貫工事にて20坪の広前と2部屋を御造営されたのでした。それから後もご神殿を増築し、韌布教50年祭を仕えるなどのおかげを頂いてきました。

先生の心には「神様に縋り、自分のなすべき事を精一杯行えば、神様は心配のないようにしてくださる。」という信念と、「心行というて、人を不足に思わず、物事に不自由を行とし、家業を働き、身分相応を過ぎさぬよう儉約をし、だれにも言わずに行えば、これ心行なり」とのみ教えを貫き通していかれるのでした。



教師拝命40年の褒賞を代表で受けられたこゆみ師（昭和38年6月10日）

日常、安心な生活を営むための5つの条件

- 1、健康な体と、それを保持するための着物があること。
- 2、最低限生きていくのに必要な食べるものがあること。
- 3、心安らかに身を置き、休養が摂れる場所、あるいは家があること。
- 4、日々の生活をともにし、心から打ち明けることの出来る家族や仲間があること。
- 5、上記のものを得るための仕事や財があること。

生涯、安心立命を得る2つのこと

「安心立命」とは、「心安らかにし、身を天命に任せ、どんな場合にも動じないこと」と広辞苑に記されていますが、その内容には2つのことが考えられます。

- 1、家屋、商売（仕事）、財産、家系を守り、先祖祀りをしてくれる子孫があること。
- 2、自分の業績を継ぎ、更に継続してくれる者があること。

和田こゆみ先生はそのどれ一つとっても安心出来る要素は無かったように感じます。ところが、先生自身は「私はいつお迎えが来ても、何の心配もない。」と断言しておられました。それは何をもってそう言わしめられたのでしょうか。

それは紛れもなく、「神様に全てをお任せし、自分のなすべき事を精一杯してきたから、神様は悪いようになさらない」という絶対信の安心感をもっておられたからだと同います。

あるとき「私は大きな欲を持ってんねん。この道のために尽くすということは、この道がある限り、子孫がいなくとも、永遠に先覚の先生方と同じように、金光様にお祀りしていただけるのや」と本部広前で、霊舎を指さしながら仰り、ご自分が行ってきたことが決して間違っていなかった、という信念をお持ちでられました。

本日このように先生のお徳を慕い、50年祭をお仕えして下さる方々がお集まりいただき、大変お喜びいただいております。

時代も違い、考え方も変化した今の世の中ですから、和田こゆみ先生と同じ事をしなければならぬというわけではありませんが、先生が教えられた信念を汲み取り、私たちの糧にさせて頂いて、神様に用いられ、安心立命の境地に到達したいものです。先生は御霊ながら、信奉者の皆様の幸せを、どこまでも願い続けてくださっておられる事でしょう。

先生が取り組まれた座右の銘

- | | |
|-------|---------------|
| 『正 心』 | 誰をも悪く思わぬよう。 |
| 『正 身』 | 自身に金のかからによ。 |
| 『正生活』 | 何でもさせていただくよう。 |

こゆみ先生の思い出（断片集）

松 山 護



- * こゆみ先生には母親の導きにより、10歳くらいの頃より色々とお世話になり、思い出も多数あり、一つのストーリーにするには長過ぎて大変ですので、今回思い出の断片集として書いてみました。
- * 「去る者は日々に疎し」の諺ではないですが、昔のことは憶えているようで案外忘れていた事もありますので、時代は後先になりますがご容赦下さい。
- * まず四つ橋筋の京町堀4丁目の市電停留所を西へ入り、少し行った右側に一寸した門構えの教会があり、土蔵もありました。門を入ったすぐ右側に井戸があり、左側には支那竹が植えてありました。
お広前は子供心には薄暗く、大きな丸火鉢があり、赤い毛布を膝にかけて初代の先生が座っておられたのを憶えております。何時の頃よりこゆみ先生とお会いしたのかは忘れましたが、その頃よりずっとお世話になっておりました。
- * こゆみ先生のごことが印象に残っているのは矢張り戦災で焼けて、現在地の幼稚園跡地に教会が建てられてからの事です。
- * 高校2年生の時の夏休み中の40日間、神田商店で縄運びのアルバイトをしていた時に、信濃橋にあったお店から配達途中や、帰り道に教会に毎日お参りし、先生から「頑張りなはれや」と励まして頂いたのを憶えております。
- * 母親からは「困った時や迷った時には自分で判断せず、教会へ参って先生に申し上げ、言われた通りにするんやで」とよく言われておりましたので、長ずるに従い、自分で商売を始めてからもその様にしておりました。
- * 現在この年になる迄信心を続けられているのも、母の導きがあったからだと思っております。
- * ラジオの修理屋をやっておりました、アメリカ製の新しい物で中々直らない、むづかしい修理の時もお参りしてお届けしてお陰を頂いておりました。
- * 先生が体調を崩されて、信者有志が交代で一泊づつ教会に泊まるということになり、神田さん、奥村さん、久米さん、坂本光吉さん、清水さん、上杉さん、葭さん、それに私がガードマン的に一泊しておりました。
- * 冬の朝5時半のお広前は寒くて真っ暗で、どちらが御神前かおぼろにしか見えない事もあり、私は方向違いの向きに座り、御祈念をしていた事もありました。
- * 住友銀行にお勤めしておられ、教会の会計を預かっておられた小濱さんから聞いた話ですが、先生は御本部の祭場ご造営の時、1千万円をお供えされた云々ということを知り、当時の1千万円は、現在の1億円以上の値打ちがあるのではないかとびっくりいたしました。
- * 先生は一貫して「信者を痛めるな」（信者には出来るだけ不要な出費をさせ

ない)「その代わりお陰はどんと持って行け」という信念がお有りになっておられたように思われます。凄いことです。

- * 先生は車に乗るのがお好きで、私が車で大祭事にご本部にお参りしてしましたら、大祭の帰りに乗せてほしいとの事で、本城さん金田さん達と乗って帰った事がありました。当時は高速道路もなく、国道2号線を4,5時間かかって帰ったように思います。帰路お腹が減ってうどん屋に停まりかけましたら、先生は、「食べんでもええから早う帰ろ」と言われ、そのまま走らせた事でした。
- * この事も前述の「信者に出費をさせたらあかん」という思いの証^{あかし}だったのかと後で思い返した事でした。
- * 焼け跡から集められた石を庭に積み上げられておりまして、大祭等の時に私たち若い者が、あちこちと動かしておりました。「うち(靱教会)は石を動かさんと大祭が来ない」とヒソヒソ話をしておりました。(笑)
- * 今は瓜破に移りましたが、昔は阿倍野斎場に有りました頃、よく教会のお墓に先生と共に車でお参りしておりました。お墓でお水を汲む時、すぐ近くに他教会の水道栓があり、そこから汲もうとしますと先生は、「そんな所から汲みなはん、公衆の水道へ行って汲みなはれ」といわれ、「よその教会の世話になるな」という気迫、負けん気がありありと感じられました。
- * 女性の先生で、一流の紫色の袴を着ておられたのは教内でもお一人だったのではないのでしょうか。兎に角超一流の先生だったことは間違いありません。
- * 先生が体調を崩され堺大浜教会の奥の離れで休養されていた時、何かの所用で訪問した事がありました。用件が済み雑談^{つつき}していた時、「靱の先生に会って帰りはりますか」と言われたのです。私は咄嗟^{とつさ}に会ったら無信心者の私だから何か叱られるのと違うかなと思ってしまいました。慌てて「今日は未だ他に



松山護氏、豊子氏結婚式(昭和37年5月14日)

用事が有りますので又寄らせて頂きます」と言い、飛んで帰りました。後で考えたのですが、そうではなく、暫く会っ

ていないから先生も私に何か言いたい事がお有りになっておられたのと違ったのか、惜しい事をしたなあと後悔したのでした。それから何日かしてお国替えされたのです。ああ悪いことをしたなあ、あの時先生も布団の中で私が(玄関まで来てい

るのだから)一寸奥まで来てくれたら話したいことが有るのに、何で帰ってしまったのかなあ?と思われていたのと違うやろうかと思い返し、何度も涙を流した事でした。

* 断片集も最後まで来てしまいました。あれから50年。私も来年は90歳になります。長い間お陰を頂き続け、未だに頼りない信心しか出来ない自分が情けない次第です。今後とも宜しくお引き立て下さいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

和田こゆみ先生の思い出

松 居 邦 昌

私が小学校4年生(昭和24年)の頃だと思えます。鞆の教会は今からいうとバラックの様な建物で、その薄暗い電灯の元でこゆみ先生は居られました。

先生は石がお好きで、馬力に一杯積んで買って、庭に貯めておられたのを覚えております。

ある時先生から私に「子供会をするから子供たちを連れておいで」と言われたこともありました。

特に忘れない思い出として心に残っていることは、教会の庭に野^{ふぎ}路がたくさん生えており、それを先生が摘んできて、火鉢の火で小さなアルミの鍋をかけて、露の葉とお醤油だけ入れて佃煮を炊いておられました。それを先生は私に「これ持って帰り」と言って下さいました。しかし子供のことでですから、露の葉は苦みが強く食べられなかったです。でもその時に作り方を教えていただいたのを思い出して、今でも露を見つけるとなつかしくて、自分で佃煮を作ったりします。先生のいろいろな生活態度を見ていますと、本当に質素な生活をしておられるなあと子供心に思ったものです。戦争の激動期から私たち両親を始め、家族をよく導いていただき、偉い先生だったと思っています。

私が学校のテストのたびに、先生にご祈念していただいたことをよく覚えております。先生は「神様をお願いしてますから元気よう学校へ行きなさいや」と言われ、その後「きちんと勉強しなさいや、そうしたら神様にお断りをしておきます」といつも言われました。先生は子供といえども非常に厳しいお話もいただきました。

先生からしかられた思い出があります。それは結婚して男の子が生まれた時に、「男の子を授けていただいてよかったね」と仰っていただき、子供にどんな名前を付けたいかが分かりませんので先生に、何げなく、「仲の良かった友人で、成績も良い人だったので、その人の名前にしようかな」と言ったところすぐくしかられました。「子供の名前を付けるのに親としての思いや願いを込めて付けなければいけない。そしてそのことを子供に伝えていかなければならない」ときつ



く言われました。その記憶だけは昨日言われたように頭に残っています。

そしてこゆみ先生からつけていただいた男の子には「真幸」(まさき)とつけていただきました。これは万葉集に出てくる言葉で、さいわいとが、無事という意味で、祖先賛詞の一節にも出てきます。そのように意義のある名前を付けていただいたことは本当にありがたいことと喜んでます

2番目の子供は女の子で、今までに松居の家には女の子が生まれていなかったのに、先生の孫が生まれたように喜んでくださいました。その子には「呉羽」(くれは)とつけていただきました。

この「呉羽」のお名前は池田にも地縁があって、池田の地名に呉服と書いて「くれは」と読むところがあります。由来は、織女や染織の技術を持った姉妹が渡来して来たのです。そしてそこから滋賀県の方へも伝えられたそうです。今の土地に住むことになったときに不思議な縁を感じたものです。

その会社の名残は、クレハ紡績を創設された伊藤忠の主人です。そのことで、私の父親、久一も、同じ出身地でそのような素晴らしい名を付けていただいたと喜んでいました。

また呉羽が学校時代に「松居さん」とほとんど呼ばれず「くれは、くれは」といって可愛がってくれたと、本人が非常に喜んでると学生時代に聞いたことがあります。



境内にて(昭和27年8月)

和田こゆみ先生の思い出

松居 秀明

大学時代までこゆみ先生にいろいろお世話になりました。今も印象的で思い出される事柄は小学低学年のことです。

その頃の父親は、何かにつけ厳しく幼い子供にとっては威厳のある存在でした。あることから父に連れられて毎日教会にお参りすることになるのですが、お結界でのお届けやこゆみ先生のお話し、お説教を頂く父の姿が記憶に残っています。子供には絶対的な存在だった父親のその時の振る舞いや姿を見て、こゆみ先生こそが神様ではと思ったのを覚えています。お話しや重みのあるお言葉、そのお姿が子供の私にそう思わせたのでしょう。



その後は一人でお参りするのですが、思い出されるのが教会の入り口付近から漂う蕎麦の煮ている匂い…当時、食べ物が少なかったからだと思いますが瓶に詰めて下さり「持って帰り…しっかりご飯食べなはれ」と何度もいただきました。神様からの頂きものなので口にはしますが、その味とエグい匂いは辛くて飲み込むように頂きましたが、今では蕎麦の佃煮が好物にまでなっています。

ゴロゴロ積み上げられたたくさんの石と大きな銀杏のある庭を眺めておられるこゆみ先生のお姿、蕎麦を煮る匂いは当時の韃教会の思い出です。今の状況下、和田こゆみ先生のお写真がある韃教会のお広前にお参りがなかなか叶いませんが、こゆみ先生の思い出を書かせていただくおかげを頂いたことに感謝いたしております。



韃教会お広前にて（昭和 29 年）

韃教会の思い出

山下 恭平

私は両親に付いてゆくというより、堀田の祖父母に連れられてよく教会にお参りしていました。それは参ったら帰りにおいしいものを食べさせてくれたり、何かを買ってくれるから嬉しいからでした。それに本部参拝にもよくいきましたが、それは汽車に乗れるから楽しいからといった理由で、自ら信心をするといった感じではなかったですね。

教会のお広前には大きな火鉢があって、寒い冬でもその火鉢に手を当てても火が入っていないくて、暖かいことはなかったです。



先生は結構こわいなあというイメージがあって近寄りがたいものがありました。ですから先生と直接話をするのはあまりなく、お袋はよくお届けをしていたとは思いますが、私はあまりありませんでした。ですから先生から直接教えを受けたりしたということはありません。

先生は身の回りのことにお金をかけず、いろいろしまつされておられたことは聞いております。

昔は釣り竿の仕事をしていた坂本さんのように、熱心な信者さんがたくさんおられました。教会のトイレも石を積んだような汚いところで、くみ取り式でした。

今の恵みに感謝し、お礼の稽古を

清水光雄



私は昭和 11 年に神戸で生まれ、母は昭和 14 年に、父は 17 年に他界しました。そこで父の次の姉である伯母に引き取られ、7 歳から 12 歳までお世話になり、その後、淡路に住む父の長姉である伯母の家で 17 歳まで育てて頂きました。その家は魚屋さんで湊教会の信者さんでした。私も 18 歳の頃少し朝参りをしたり、湊から船で玉島へ行き、そこから皆で歩いて御本部に参拝させてもらった事がありました。

昭和 35 年当時（24 歳）私は結婚して 2 人の子供に恵まれたころです。武庫之荘の市場で叔父さんから借りていた店を明け渡し、尼崎の常松という所に移り住みました。それから行商をしましたがつまみかず、借金は溜まるし生活はどん底で、苦しい毎日でした。そこで淡路の伯母の所に借金しようと明石まで行きましたがよう行かず、これではいけないと思って 2 号線を歩いて神戸に向かいました。須磨の浜辺に着きましたら夕暮れになり、夕日が沈むのを見て切なく、自分の今まで支えてきた自信がガタガタと崩れ、無力さを悟りました。その日は 8 月 23 日の地蔵盆の日で、各地で盆踊りの声が賑やかに聞こえてきました。みんな幸せそうだなあと思いました。家にある妻と子供のことを思いますと心が痛みました。無心になって神戸の町から尼崎に向かって歩きました。そして夜遅く家に着きました。

その頃、淡路でお世話になった伯母から一通の葉書が届きました。そこには「大阪の鞆教会にお参りするよう」と書いてあり、鞆教会を探して私共 4 人が夕暮れに初めてお引き寄せを頂くことが出来ました。先代のこゆみ先生がいらっしやいまして、自分達に色々ありがたいお話しをしていただき、帰りました時は心が洗われ、清々しく元気にならせて頂きました。それより家内に弁当を

作ってもらい、今までのむら気もなくなり、一心に仕事に励みました。そして商いも少しづつですがよくなり、品物も増え、家内もよく協力してくれました。

行商に行くコースは、月、水、金と家の近くを回り、火、木、土と場所を別けて商いをしました。しかしなにぶん路上ですのでよく売れ出すと人がたかり、近所の人から邪魔になると言われ、その都度場所を変えます。すると前よりももっとよく売れるようになりました。

その頃道筋の有馬さんと言う人が3,7坪の納屋を貸して下さいまして火、木、土と店を開きました。そこでよく売れるようになり、今度は隣でパン屋をしていた有馬さんの店も貸して下さい、そこに腰を落ち着け、毎日商いをすることになりました。その有馬さんには大変ありがたく思っています。今度は店の反対側の岩橋さんが土地を売ってやろうという話がありました。先代先生にお届けすると、

「清水さん、負けてもらって買いなはれ」と言っていたが、欲しいと思いましたが土地は172坪もあり、4300万円ととても買える金額ではありませんでした。そこで100坪と72坪に別けてもらい、72坪をいろいろの人にお世話になりつつ買わせていただきました。

昭和48年のオイルショック時にはプレハブを建てて商売し、昭和54年に鉄骨の本建築のおかげを頂きました。また平成3年に株式会社になり、平成11年に長男に社長を譲りました。また有馬さんが在世中40坪弱の土地を1億円で譲りたい



いと言っていました。バブルもはじけ2700万という安値でわけていただく事が出来、そこへ現在鉄骨2階建ての新築をさせていただき、今までの店も改装してまもなく新規開店する運びとなっています。

長男と次男が店を継ぎ、9人の孫に恵まれ、一族17名皆健康で、神様に守って頂き誠にありがたいこととあります。

韃教会にお参りのおかげをいただくようになって約40年。先代こゆみ先生、正雄先生、現親先生と長きに渡り、御祈念、御指導いただき、誠にありがたいことで、おかげを頂いてきた過去の事をいろいろ思い出しますと、御礼の足りない事ばかりです。

親先生に輔教にならせていただき、誠にありがたいことですが、私は何のお役にも立ちませず、申し訳なく思っています。これからは自分が今まで数々のおかげを受けてきた事や自分がいただいている信心。それは自分は神様をありがたいと思わせていただく心。今の恵みに感謝し、お礼の稽古をさせていただくことなど常に思っていますことを人様にお話しさせていただき、万分の一でもお礼の信心ができるようになりたいと思っています。これからも至りません自分ですが、今後ともよろしくお願ひします。 (輔教体験発表、平成13年9月24日)

和田こゆみ先生年表並びに関連記事

明 治

- 20年12月11日 兵庫県三原郡阿那賀村にて鍵山作太郎、きよのの長女として出生（誕生の時から母の山崎姓を継ぎ、山崎こゆみと名のる）
(1887)
- 32年3月 兵庫県三原郡阿那賀村立阿那賀尋常小学校卒業。
- 36年3月 兵庫県津名郡浅野村外五ヶ村立浅野高等小学校高等科卒業
- 36年4月 神戸市の産婆学校に通学。
- 38年頃 満州安東にて2年7か月間高柴とらを女医の元で勉学。
- 39年4月 大阪市北区私立関西学院女子薬学校に1年間通学。
- 40年4月 朝鮮釜山公立病院助手勤務。
- 40年9月 神戸市立東山病院看護婦副長勤務大正元年9月迄。

大 正

- 元年10月 朝鮮慶尚北道公立慈恵病院看護婦長勤務。大正4年迄。
- 4年4月 兵庫県津名郡岩屋町にて助産婦勤務。10年9月迄。
- 11年2月29日 山崎こゆみ、金光教教義講究所別科卒業し、6月19日教師補任。
- 11年5月16日 こゆみ、初めて韃教会を訪問し安兵衛と面会。
- 11年10月16日 こゆみ、韃教会副教会長に任命される。
- 13年1月12日 こゆみ、和田安兵衛の養女として縁組奏上祭奉行。
- 14年3月19日 こゆみ、岩屋教会長拝命。

昭 和

- 2年9月 山崎こゆみ、和田家に入籍し、和田こゆみと改姓。
- 5年(1930) 和田こゆみ、堺大浜へ布教開始。昭和6年6月3日に鍵山正雄と交替。
- 12年7月7日 支那事变勃発。
- 15年3月30日 堺大浜小教会所認可。
- 16年3月31日 こゆみ、韃教会副教会長を辞任し岩屋教会長就任。
(1941) (岩屋教会常在教師、本庄哲男)
- 16年12月14日 第二次世界大戦勃発。
- 18年4月4日 こゆみ、子宮筋腫にて回生病院に入院、12日手術。
- 18年12月3日 初代韃教会長和田安兵衛、89才にて帰幽。同5日告別式。
(斎主・白神信太郎師)
- 18年12月27日 和田こゆみ、岩屋教会長を辞任し、同日韃教会二代教会長拝命。
- 19年6月24日 こゆみの実母きよの帰幽、25日韃教会にて告別式。
- 19年9月22日 こゆみ、喀血にて1か月静養。
- 20年3月13日 第二次世界大戦にて教会建物焼失し堺大浜教会へ疎開。
(1945) 8月15日終戦。祭典は同教会にて合同奉仕。
- 20年12月26日 大阪市西区阿波座2番町、明治幼稚園跡地の壕舎にて取次再開。
- 21年5月9日 壕舎増築し、戦後の初大祭奉仕。

22年12月10日	こゆみ、大講義に補せられる。
23年7月20日 (1948)	明治幼稚園跡地約5百坪を教会敷地として購入し登記。 しかし大阪市土地区画整理により半減する。
25年9月3日	ジェーン台風にて仮広前倒壊。
25年10月24日	広前25坪新築落成、教祖大祭奉仕。
29年10月24日	神殿12坪増築。靱布教50年祭奉仕
38年6月10日 (1963)	こゆみ、教師拝命40年、本部祭場において教主金光様より 代表にて褒賞を受ける。
40年3月31日	教師控え室、和室10坪余増築。
44年12月1日 (1969)	こゆみ、初代教会長例年祭奉行後、脳軟化症にて倒れ、後日、 日生病院に入院加療、同年末に堺大浜教会の離れ家にて静養。
46年2月23日 (1971)	和田こゆみ83才にて帰幽。25日堺大浜教会にて密葬。 3月7日、靱教会にて本葬。
47年2月20日	こゆみ1年祭奉行。(祭主、水野武之介師)
49年2月24日 (1974)	こゆみ3年祭奉行。(祭主、水野武之介師) 阿倍野墓地、瓜破霊園に移設。同時にこゆみ姫の墓碑建立。
51年2月22日	こゆみ5年祭奉行。(祭主、白神信太郎師)
55年7月27日 (1980)	鍵山正雄、兼務教会長辞任、鍵山公生、靱教会長に就任。
56年2月22日	こゆみ10年祭奉行(祭主、白神信幸師)
60年10月27日	靱布教80年金光大神大祭並びに広前御造営奉告祭奉行 (祭主、白神信幸師)
61年2月23日	こゆみ15年祭奉行(祭主、白神信幸師)
平 成	
3年2月24日	こゆみ20年祭奉行(祭主、白神信幸師)
5年12月4日	和田安兵衛50年祭奉行(祭主、白神信幸師)
7年10月29日	靱布教90年祭奉行(祭主、白神信幸師)
13年2月24日	こゆみ30年祭奉行(祭主、白神信幸師)
15年12月6日	和田安兵衛60年祭並びに信徒会館新築落成奉告祭奉行 (祭主、白神信幸師)
16年3月18日	道隆、靱教会副教会長に就任。
17年1月8日	二代堺大浜教会長・鍵山藤子帰幽。(93才)
17年10月30日	生神金光大神大祭並びに靱布教百年祭奉行。 (祭主、鍵山公生教会長)
23年2月20日	こゆみ40年祭奉行(祭主 鍵山公生教会長)
令 和	
3年2月23日	こゆみ50年祭奉行(祭主 白神紀美雄師)

韮教会二代教会長 和田こゆみ先生50年祭執行

日時：令和3年2月23日（祝） 午後2時より

祭主：大阪教会 副教会長 白神紀美雄先生

令和3年3月

- 1日（月） 月例祭執行 午後2時
- 6日（土） ご本部月参拝 午前6時教会出発
- 14日（日） 月例祭及び月例霊祭執行
午前10時30分
祭典後教話、大阪府連盟布教部講師
- 19日（金） 信徒共励会 午前10時30分
- 21日（日） 春季霊祭執行 午後2時
- 28日（日） 春の合同墓前祭 午前10時30分
於：瓜破霊園



4月

- 1日（木） 月例祭執行 午後2時
- 10日（土） ご本部 天地金乃神大祭代表参拝
- 11日（日） 月例祭並びに勤学祭執行
午前10時30分
- 16日（金） 信徒共励会 午前10時
- 18日（日） うりわり墓参 午前7時
- 24日（土） 月例霊祭執行 午前10時30分
祭典後教話、大阪府連盟布教部講師



5月

- 1日（土） 月例祭執行 午後2時
- 2日（日） うりわり墓参 午前7時
- 3日（祝） 大祭準備大掃除 午前10時
- 8日（土） ご本部月参拝 午前6時教会出発

※ 5月9日は月例祭を執り行いませんのでご注意ください。

5月16日（日） 午前10時30分より

天地金乃神大祭奉行

祭典後説教：大阪府連盟布教部講師